

聖書：マタイ 6：5～8

説教題：必要を知っている父

日時：2018年6月24日（朝拝）

6章に入って「善行」の問題が取り上げられています。1～18節にかけて「施し」、「祈り」、「断食」の三つが取り上げられます。イエス様が述べておられる基本メッセージは1節にある通り、「人に見せるために人前で善行をしないように」ということです。今日はその二つ目の「祈り」についてです。私たちは「祈り」をどのように考えているでしょうか。祈りは神との関係に関わります。そういう意味で祈りは人間がする営みの中で最も崇高なものと言えます。ミレーという画家の「晩鐘」という絵をはじめ絵画においても、人が祈る姿は格別美しいものです。それは人間が最もきよく見える時であり、神聖な時間です。しかしだからこそ、そこには誘惑や落とし穴もあります。

イエス様は5節で「また、祈るとき偽善者たちのようであってははいけません。彼らは人々に見えるように、会堂や大通りの角に立って祈るのが好きだからです。」と言われます。会堂で祈るというのは分かりますが、大通りの角で祈るとはどういうことでしょうか。それはユダヤ人の祈りの時と関係していたと考えられます。使徒の働き3章に「ペテロとヨハネは、午後3時の祈りの時間に宮に上って行った」とあるように、あるいはダニエル書に「彼は以前からしていたように、日に三度ひざまずき、自分の神の前に祈って感謝をささげていた」とあるように、敬虔なユダヤ人は午前9時、正午、午後3時の3回、神の臨在の象徴であるエルサレム神殿に向かって祈る習慣があったようです。そして本当に敬虔な人は何かをしても、道を歩いても、その時間には立ち止まって祈るべきと考えられていました。偽善者はこれを反対から考えるのです。すなわち祈りの時間に人通りの多い四つ角にたどり着くようにと考えて家を出発する。そしてちょうどその時間が来たということで、そこで神殿に向かって祈るポーズを取り、祈り始める。すると人々は思うわけです。あの人は敬虔な人だ！私はよくあの人があのように祈っている姿を見かける。信仰的な人とはああいう人のことを言うのだ！そうして賞賛を受けるのです。しかし実際にその人が心の中で気にしているのは、人々が私をどう見ているかということ。その心は神に向かっておらず、ただ人前で神に向かっているような演技をしている。これがイエス様が非難している「偽善」ということです。

私たちはどうでしょう。私たち日本人クリスチャンは人前で堂々と祈りのポーズを取

ることはほとんどないかもしれません。祈る姿を高く評価するユダヤとは違って日本では交差点で立ち止まってお祈りしていたら、かえって変人だ！という目で見られてしまいます。食事のお祈りでさえレストランなど公共の場所で声を出してすることには勇氣がいるということもあります。ですから人前で四つ角で祈ろうとする人はほとんどいないと思います。しかし祈る時に他の人がどう思うかということが気になり、人の評価ばかりに心が向いていることはないでしょうか。美辞麗句を並べ、みことばをちりばめ、素晴らしいお祈りだ！敬虔な人だ！と人々から感心され、一目置かれない。もしそのようなことに専ら心が向いているなら、ここの偽善者とどれほど違っているでしょう。あるいは人前で朗々と祈る人ばかりでなく、逆に「私は滑らかに祈れないから、人前では祈りません。祈りの奉仕をさせられるなら、教会に来ません。」と脅迫する人(?)もいるものです。もちろん色々な他の事情もあると思いますが、そのように人の評価ばかりを気にしているなら、それも偽善者の祈りに通じて来ます。祈りは何よりも神に対してなされるものであって、神はどんな祈りでも、幼子の単なるオギャーという言葉でも喜んで聞いてくださいます。そのことに思いが集中して向けられれば良いのです。

イエス様は6節で「あなたが祈るときは、家の奥の自分の部屋に入りなさい。そして戸を閉めて、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。」と言われます。そこは周りからは見えない場所です。倉庫のような窓さえもないような部屋を指すと言う人もいます。しかし素晴らしい事実は、その隠れたところに父なる神がおられるということです。私が祈る部屋に神はいてくださり、1対1で私の祈りを聞いてくださる。そこで神とお話し、神と交わる。ここに祈りの本質があります。ある人は、でも私には奥まった自分の部屋などないと言うかもしれません。個人の部屋があれば、もっと祈りの生活ができるだろうにと。しかし部屋があれば問題は解決するかというと、そうでもありません。思い出すのは神学校時代の男子寮にあった祈りの小部屋のことです。寮は基本的に二人部屋のため、各フロアーには祈りに集中するための小部屋がいくつかありました。そこに行けば祈れるかと言うと、そうでもないのです。意気込んで入って行くのですが色々なことが頭に浮かんで来て集中して祈れないということもある。そしてそういう時に気になるのは、入ったばかりなのに、すぐ出て行ったのではあまりにカッコ悪いということ。阿部君はさっき入ったばかりなのにすぐ出て来ちゃって、一体何をしに行ったんだろうかと思われては困る。だからもうちょっと、あと5分くらいは我慢して、ここに粘っていなければならぬかな？そんな風になってしまったら、これも偽善者と同じことになってしまいます。密室があっても祈りの実質がなく、結局演技のために使って

しまうという誘惑もあるわけです。

部屋がないのに祈りに集中した例としてジョン・ウェスレーのお母さんスザンナという人の話があります。彼女は 19 人のお母さんで、子どもが絶えず周りでワイワイギャーギャー騒ぐ中、とても一人の部屋で祈ることなどできません。そんな彼女にとっての祈りの部屋、密室はどこだったのでしょうか。それは彼女のエプロンの中でした。彼女は祈る時、子どもが周りでたむろしている中、エプロンをかぶって祈ったと言います。すると子どもたちは「お母さんは今、神様と大切な時間を過ごしているんだから、みんな、シー！」と言ったそうです。この母はウェスレーに大きな影響を与えた人です。もちろんこのような方法によっても、しようと思えば偽善はできます。しかし彼女はこうしてエプロンをかぶって、神との交わりに没頭したと言います。

またある人は、イエス様は隠れた所で祈れと言われたから、私は人前では祈りませんと言います。詳しく説明する必要はないと思いますが、イエス様はもちろんここで祈りは人に見られてはいけないと言っているわけではありません。もしそうだったら教会で祈り会は開けませんし、礼拝プログラムから祈りを削除しなければなりません。聖書には兄弟姉妹が集まってともに心を合わせて祈る祈りに大きな祝福があるということが述べられています。そのことを否定するものではありません。ただ今日のみことばは、人前で、人に見られるための、形だけの祈りになってはならないということです。真の祈りをささげようとするなら、まず誰も見ていない場所での神との一對一の交わりの時を大切にしなければならない。そういう個人の祈りの生活が確立されてこそ、公の場所でも、いつもと同じように、神に心を注ぎ出して祈ることができるように導かれるのではないのでしょうか。そういう神に向かう祈りに報いがあると言われていています。神はご自身を現わし、ご自身との交わりから来る豊かな祝福を注いでくださるのです。

ではその祈りにおいてどのように祈るのか、が 7~8 節です。まず 7 節：「また、祈るとき、異邦人のように、同じことばをただ繰り返してはいけません。彼らは、ことばが多いことで聞かれると思っているのです。」 「異邦人」とは「まことの神を知らない人々」ということです。その人たちの特徴は同じ言葉を繰り返してでも長く祈れば聞かれるという考えです。その一例が第 1 列王記 18 章のバアル預言者たちの祈りに見られます。カルメル山でエリヤと対決したあの場面で、彼らは朝から昼までバアルの名を呼び、祭壇の周りを踊りましたが一向に答えはありません。そこで彼らはどうしたでし

よう。彼らは「ますます大声で叫び、彼らの慣わしによって、剣や槍で、血を流すまで自分たちの身を傷つけた」とあります。ことば数が多ければ、あるいはそこまでの熱心さを示すことによって、ついに神は聞いてくださるようになるかと彼らは考えた。しかしイエス様はそのような祈りをしてはいけないと言われます。念のため申し上げますと、イエス様はここで長く祈ってはならないと言っているわけではありません。イエス様ご自身、しばしば徹夜の祈りをされました。また繰り返しの祈りを一切禁じているのでもありません。イエス様はゲッセマネで三度繰り返して祈られました。イエス様がここで問題にしているのは、多くの言葉を重ねれば、あるいは長く祈れば、それだけ祈りは効果あるものになる、あるいは私たちのパフォーマンスや工夫によって神の関心や注意をより引き付けることができるという考えです。それは本当の神を知らない人の考えだと言われる。では私たちは神をどのような方として仰ぐべきなのでしょう。8節後半:「あなたがたの父は、あなたがたが求める前から、あなたがたに必要なものを知っておられるのです。」 私たちが祈る前から神はもう分かっている。そういう意味では祈る必要はない。神に知らせるという意味では祈る必要は全くない。

では私たちの祈りには何の意味があるのでしょうか。その答えは祈りは神に知らせるために必要なのではなく、神との交わりのために必要なものであるということです。ここで神が私たちの「父」と言われています。ですから父と子どもの関係を思い浮かべてみれば、幾らか分かります。人間の父もある意味で子どもの必要を知っています。どんな時期にどんなものを与えることが必要か、子ども以上に知っています。そして子どもが願うよりも先に父はその必要なものを多くの場合、与えています。それと同じように天の父も、私たちの必要をすべて知っていてくださる方として、私たちが祈り求めるより先に多くのものを与えて下さっています。私たちはそのことをまず感謝すべきでしょう。しかし神は全部をそのようにはしません。ある事柄については、私たちが神に祈り求めることを通して、それを受けるという方法を取られます。なぜでしょうか。それはまず神が私たちとの交わりを望んでおられるからです。父である神は、その子どもである私たちが神のところへ行くことを望んでいます。ただ機械的に必要を満たしてやればそれで良いと考えるのではなく、私たちが祈りを通して神のところへ行き、神との交わりの中に歩むことを神が欲しておられます。神がそのように私たち一人一人を求め、私たちとの生ける交わりを望んでくださっているとは何という驚きまた特権であることでしょうか。しかしこれは同時に私たちのためでもあります。私たちは祈る前から神は私の必要を知っているなら、私が祈らなくても、それを与えてくれるべきだ!と言うべきで

しょうか。それはあまりにも凶々しい態度です。これではどっちが上で、どっちが神か、分からなくなってしまう。そしてもし私たちが求めなくても神がすべてを与え続けたら、しまいには私たちは「神とは誰だ！」などと言いかねません。感謝もしない、高慢で文句ばかり言う人間になるでしょう。そして高慢は破滅に至ります。そういう私たちにとって、求めることによって受けるという方法を神が残しておられることは良いことなのです。私たちはこうして神のもとへ行きます。そして神との交わりの中で、ただ自分中心的なことをべらべら述べるのではなく、神の御心にかなうことを祈るということを学びます。その交わりを通して私たち自身が整えられるのです。そしてこの父なる神との生ける暖かな交わりにおいて私たちは慰めを受け、力を受け、この方を知るところから来る勇気を与えられるのです。カルヴァンもこの箇所の注解でこう言っています。「信仰者は神が知らないことを神に告げるために祈るのではないし、神にそのなすべきことを促したり、急がせたりするために祈るのでもない。むしろ信仰者は自分自身が一層神を求めるようになるために祈るのである。また神の約束を祈りにおいて黙想することによって信仰を発揮するために、またその胸に飛び込んで様々な心配から解放されて安らぎを得るために、そして私はただこの神にのみ、自分と他人のためのすべての良きものを求め、また期待していることをあかしするためにである。」と。

果たして私たちの祈りはどうでしょう。もし私たちの祈りが、人にどう見られるかということにばかり気を使い、真に心が神に向けられていないなら、それは何ともつたいないことでしょう。また教会にいる時だけでなく、家に帰ってから密室で祈らないとしたら、それは何と神の子どもたちの特権を放棄していることになるでしょう。私たちは地上にあって日々色々な困難にぶつかり、色々な必要を覚えています。しかしここに素晴らしい方法が与えられています。私たちが改めて心に留めたいことは、父なる神は私たちが祈る前から、私たちに必要なものをすべて知っているということです。そういうお方として私たちが祈るよりも先に神が与えてくださっているものもありますが、祈りによって、ご自身に求めることを通して、受けるという道も残しておられます。神はそのことにおいて、ご自身のもとに来るようにと私たちを招いておられます。そしてご自身との交わりを通して力を与えられ、慰めを与えられ、元気を回復し、すべての良き物を受け取って、喜びを持って生きるように招いてくださっています。私たちはそのことを思っ日々、父なる神のところに行きたいと思ひます。隠れたところで天の父にお会いし、天の父と語らうその一時を、自分の人生の最もかけがえのない時、最も大切な時、最も楽しみの時としたい。そして天の父が御心に従って与えてくださる最善のものを受

け取り、父の御心になるために父とともに歩む、その子どもたちの特権ある歩みへ進みたいと思います。